

# モラリストとしてのミル父子

余暇と知徳の陶冶

立 川 潔

## I 問題の所在

アダム・スミス (Adam Smith) は、『道徳感情論』第6版第1部第3篇第3章を次の文章で始めている。

「富者や権力者を称讃するどころか、ほとんど崇拜し、そして、貧しく卑しい境遇の人々を軽蔑し、あるいは少なくとも無視するという、この性向は、身分の区別や社会秩序を確立し維持するのに必要であるけれども、同時に我々の道徳感情の腐敗の重大で最も普遍的な原因でもある。富貴が、しばしば、知徳にのみ相応しい尊敬と讃美の念とをもって評価され、悪徳と愚行だけがその適切な対象であるはずの軽蔑が、しばしば極めて不当に、貧困や弱さにあたえられるということは、あらゆる時代のモラリスト達の不満であった。」(Smith [42] pp. 61-62, 訳(上) 163頁: 訳は適宜変更させていただいた。以下同様)

ミル父子は、まさに富貴が尊敬と讃美の念とをもって評価され、知徳が軽んじられていることに不満を抱くモラリストであった。スミスは、「王侯の宮廷あるいは貴人の接見室において、成功と昇進とは、理知的で豊かな知識をもった同輩の評価にではなく、無知で自惚れが強く高慢な目上の者の気まぐれでばかげた鼻厩に依存しているので、追従と欺瞞があまりにも頻繁に優秀さや能力を圧倒する」ことになるとして、上流社会の道徳的

腐敗を指摘したが (Smith [42] p. 63, 訳(上) 167頁 - 68頁), 他方で, 上の引用に見られるように, 富者や権力者に対する人々の尊崇が社会秩序の維持に必要であるとも主張していた。

ジェイムズ・ミル (James Mill) と若き哲学的急進主義「伝道」時代のジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill) にとって, 貴族支配が生み出している富貴に対する尊崇は, 貴族社会の維持に寄与するとしても, 上流社会の道徳的腐敗だけではなく, 社会全体の知徳軽視を生み出すとともに, 民衆の真の利益の実現を阻んでいる元凶であった。したがって, 彼らの政治改革の目的は, 貴族の権力濫用を抑制するだけではなく, 「富を唯一の望むべき対象にし, 貧困をほとんど唯一の恐怖すべき災いにしている政治制度」(Mill [23] p. 432, 訳 246 頁) を刷新し, 知徳がそれらに相応しい尊敬と讃美の念をもって評価される社会を構築することにあつたのである。彼らが, 経済において, 「分配の自然法則」や「蓄積の自然法則」(Mill, J. [16] p. 285; cf. [10] p. 65, 訳 57) の貫徹を求めたのも, 無限の物質的繁栄を可能にする条件としてではないことに注意が払われなければならない。むしろ, 彼らの経済的自由主義の主張には, 富の追求を中庸な程度に抑制し, それによって可能となった余暇を知徳の追求に捧げる物質的基礎を形成するという意図が込められていたのである。以上のことを で明らかにしようと思う。

しかし, ジョンは, 1829 年頃から, 貴族支配を排除する政治および経済改革を行うだけでは, 人々が知徳の涵養に勤しむというミル父子にとって理想とされた社会が形成されるとは考えられなくなった。 では, この変化を生み出したジョンの社会認識の変化を明らかにし, 彼が, 個人的判断の権利の行使を支持するリベラリズムに対して, それまでにない激しい批判を展開するとともに, 精神的権威の確立を自らの喫緊の課題として設定したことを論じる。

では, 精神的権威に自ずと信従するという民衆像が揺らぎ, 世論が知

徳の陶冶に無関心な中間階級による「数の権威」となることが危惧されるにつれて、スミスにとって適宜性の磁場として中庸という積極的な意味を担っていた mediocrity が、ジョンにとっては知的道徳的卓越性を自らに引き寄せ圧殺してしまう凡庸の意味となり、この凡庸の支配こそモラリストの彼にとって恐るべき事態と認識されていくことを明らかにする。

以上の展開から、ミル父子の功利主義は知徳の快楽を重視するモラリストの功利主義であったことを明らかにしたい。それによって、ロマン主義の影響とされるジョンの思想的特徴の多くが、父ジェームズの思想からの離叛であるよりも、むしろその思想の継承であったことも了解されるであろう。

## II 政治および経済改革と知徳の陶冶

### II - 1 モラリストとしてのジェームズ・ミル 「蓄積の自然法則」の貫徹と議会改革の目的

ジェームズ・ミルは、地主貴族を維持する限嗣及び長子相続など「分配の自然法則に加えられた不自然な抑制」を廃し「蓄積の自然法則」(Mill, J. [16] p. 285) の貫徹を求めた。そして、そのためにも貴族の利益に奉仕する議会の改革を目指した。しかし、このことは、彼が「生産のための生産」(Marx [4] B. 621, 訳 775 頁) のシステム、あるいは富に対する無限の欲望を解放するシステムの実現を意図していたことを意味するわけではない。ジェームズを産業資本のイデオログとみなす立場からすれば奇妙に聞こえるであろうが、彼は、「蓄積の自然法則」の貫徹によって、むしろ人々の物質的な欲求が「合理的」ものに限定され、富の追求が過度なものから穏やかなものへと変わることを期待していたのである。ジェームズ達、哲学的急進派の活動が、今日からすれば資本の論理に適合的な社会形成に一定の役割を果たしたという評価が可能だとしても、そのことは、必ずしも彼らの意図がそこにあったことを意味するわけではないのである。

ジェームズは、よく言われるように、統治者の権力濫用を抑止するために政治改革を主張していただけではない。なるほど彼の「統治論」だけ読めば、その解釈が妥当であるように思われよう。たとえば彼は、「統治についての全難問は、あらゆる人の保護のために必要な権力を委任されている人々がその権力を濫用できないようにする手段に関係している」( Mill, J. [9] p. 5, 訳120頁)と論じている。しかし、彼が、統治の最も重要な目的を人々の知的道徳的改善においていたことは、「教育論」を読めば直ちに明らかとなる。その論文で彼は、幸福に不可欠な資質として、「古代人の4つの主要な徳」、すなわち自らの幸福のために必要な資質としての知性(Intelligence)と節制(Temperance)、さらに同胞の幸福に資する度量と正義(Generosity and Justice) 両者をあわせて仁愛(Benevolence)とも呼んでいるを挙げている(Mill, J. [8] pp. 15-16, 訳42-45頁)<sup>1)</sup>。彼は、教育の目的を、これらの資質を形成する習慣的な観念の連鎖を作り上げることとし、その主要な環境から、教育を、幼少期を中心とする家庭教育、技術教育と呼ばれる学校教育、世論の好意的評価を誘因とする社会教育、さらに政治教育に区分する。彼によれば、家庭教育と技術教育は社会教育に、後者は完全に政治教育にそれぞれ依存しているから、「政治教育がアーチの要石

---

1) ジェームズが、幸福に不可欠な資質として、「古代人の4つの主要な徳」を挙げていることから、また後に見るように、ミル父子が、知徳の陶冶のための余暇の必要性を強調していることから推察しうるように、モラリストである彼らは、プラトンから多大な影響を受けている。ジョンが『自伝』で述べているように、ジェームズは「自分自身の精神的修養は、他の誰よりもプラトンに負うところが大きいと考えていた」(Mill [38] p. 25, 訳28頁)。たとえば、プラトンは、「金をつくることを尊重すればするほど、それだけますます徳を尊重しないようになる。富と徳とは、元来そういう対立関係にある」(Plato [41] p. 256, 訳(下)207頁)と論じて、「富と徳」の両立ではなく、「富対徳」の対立関係を強調しているが、この対立関係の強調はミル父子にも本稿で論じるように投影されている。また、プラトンは、寡頭制支配を「富と金持ちが尊敬されるのに応じて、徳と有徳な人々は尊敬されなくなる」国家であることを論じている(Plato [41] p. 256, 訳(下)208頁)が、この寡頭制支配をミル父子は現存の貴族政として認識し、知徳が尊敬される社会への転換を自らの課題として設定しているといえる。

であり、アーチ全体の強度は政治教育に依存している」( Mill, J. [8] p. 45, 訳 111 頁) ことになる。つまり、政治機構は、統治者の権力濫用を抑止するためだけではなく、知徳を育成する最も重要な契機と位置づけられているのである。

「欲求の主要な対象が、徳や才能に対する報酬ではなくて、少数の支配者の意志への媚び諂いと彼らの鼻屑を勝ち得たことに対する報酬と考えられているような、すなわち目上の者に取り入ることが、富や権力、尊重される地位等における昇進の唯一確実な手段と考えられているような政治機構であるところでは、目上の者を喜ばす手段が、この場合、最も重要な追求の対象となる。」( Mill, J. [8] p. 46, 訳 112 頁)

この記述が、先にみたスミスの上流社会の道徳的腐敗についての言説を踏まえていることは間違いなかろう。しかし、スミスは、富貴を尊敬し称讃する人々の性向が、権勢をめぐるの道徳的腐敗を生むとしながらも、人間本性に根ざしたこの性向は、社会秩序の維持にとって必要であるとも主張していた。それに対して、ジェイムズは、この性向が、生まれつきの性質ではなく、富と名声との強力な観念の連鎖を生み出す政治機構によって形成されたことを強調する。この連鎖によって、権力を握っている貴族が社会の一般的風潮を規定し、社会の他の人々にとって「彼らを模倣することが野心の根拠となり、彼らに似ることが名誉の源泉」となるのである (Mill, J. [12] p. 255)。しかも貴族は、「高貴な精神的資質」が「名声の原因」となることを妨害する。彼らは、「知的な徳やその他の徳を陶冶するための動機」を何らもっていないばかりではなく、自分達がもちえないそれらの徳に対する尊敬が社会に生じないようにする (Mill, J. [16] p. 291)。さらに富による名声は、気品を高価と同義語にすることによって、真に「気品のある生き方に対する趣味」が一般に普及するのを妨げ、「趣味の腐敗を

もたらず」(Mill, J. [16] p. 286)。それゆえ「幸福のより価値ある要素」である「趣味の快楽, 知性の行使の快楽, 徳の快楽」は, この社会で「陶冶」されることはない(Mill, J. [13] II. p. 366)。このように, ジョンが『功利主義論』で行った快楽の質的区別は, すでにジェイムズにおいても, たんなる偶有ではなく, 貴族社会から民衆社会への転換によって実現される快楽を語る上で欠くことのできない意味を担っていたのである<sup>2)</sup>。

ところで, スミスは「中流および下流の身分」の人々が財産を獲得する

- 2) ジェイムズは次のように述べて感覚的快楽よりもこれらの快楽のほうが「幸福のより価値ある要素」であることを強調している。「趣味の快楽, 知性の行使の快楽, 徳性の快楽は, 適切に陶冶されるならば, 欲望の誘惑を抑制する力を獲得するのであり, 感覚が直接与えることができるあらゆるものよりも幸福のより価値ある要素として重んじられる。」(Mill, J. [13] II. p. 366)

このように, 快楽の質的区別は, ジョンだけではなくジェイムズにおいても, その思想の重要な要素となっているのである。快楽の質的区別は, なにもミル父子に限ったことではなく, 他の多くの思想家にも, たんなる偶有的属性としてではなく認められる。たとえばゴドウィン(William Godwin)は次のように言う。「我々が影響される快楽の種類がいかに多くとも, 真に慎慮ある人はより気品に満ちた(exquisite) 快楽のために下等な(inferior) 快楽を犠牲にするであろう。公平な精神で他の人々の幸福を生み出したり観照したりしてきた人は, こうした活動があらゆる感覚の中でずば抜けて最も快適なものであることを否定しないであろう。しかし, 感覚的な快楽(sensual pleasures)を少しでも度を過している人は, ちょうどその分だけ, この最も高級な快楽(this highest pleasure)を獲得する能力を損なうのである」(Godwin [2] II. p. 833)。

むしろ, モラリストの立場からすれば, 快楽の質的区別は本質的な区別なのである。それゆえ, ジョンの快楽の質的区別の「独自性」よりも, 快苦を量に還元したとされるベンサムの特創性のほうが強調されるべきだと思われる。

プラトンは, 『国家論』第9巻で魂の3部分 知を愛する部分, 名誉を愛する部分, 欲望の部分 から快楽にも3種類 知から得られる快楽, 名誉から得られる快楽, 欲望ないし金銭から得られる快楽 あるとし, この3つの快楽の優劣を比較する議論を行っている。そこでプラトンは, 「物事が正しく判定されるためには……経験と, 思慮と, 言論(理)によって」判断されなければならないが, 経験, 思慮, 言論(理)いずれにおいても知を愛する人が最も優れた判断者であるから, 「物を学ぶところの魂の部分がかつ快楽こそが, 最も快いものであり, そしてわれわれ人間のうちでは, まさにその部分がかつ内において支配しているような人間の生活こそが最も快い生き方である」と結論づけている(Plato [41] p. 293-94, 訳(下)302-06頁)。快楽を質的に区別し, その優劣を判断する能力を高級な快楽を享受する人々にのみ付与するジョンの『功利主義』の議論は, このようにプラトンにその原型があるのであって, 知徳を重んじるミル父子の功利主義の主要な源泉のひとつがプラトンにあることはここからも明らかであろう。

最良の方策は、「慎慮，正義，不動，節制」を身につけることであると述べ、彼らにおいては「徳への道と財産への道」が一致しているとして(Smith [43] p. 63, 訳(上) 166頁 - 67頁)、彼らの富の追求に寛大でありえたが、ジェイムズは人々が富の追求に趨っている状態により厳しい眼を向けるモラリストであった。

「いやしくも同胞のことを気にかけているように思われる人はなんと少数であろうか。大抵の人々の生がなんと完全に富と野心の追求に奪われてしまっていることであろうか。家族愛，友人愛，祖国愛，人類愛が，富や権力への愛と対立した場合，なんと多くの人々においてそれらが無力になることか。このことは誤った連合の結果であり，教育と道徳において最大の注意を要するものである。」(Mill, J. [13] II. p. 215)

ジェイムズは，この「誤った連合」を断ち切り，知徳が名声と結合する観念の連鎖を政治機構の改革によって生み出そうとしていたのである。

「欲求の主要な諸対象が，偉大で有徳な行為に対する自然の報酬……と考えられているような政治機構であるところでは，称讃すべき行動に向かわせる全ての称讃すべき資質，すなわち，偉大な知性，完全な節制，圧倒的な仁愛を獲得しようという豊かな熱情が人々の間に普及するのが自然である。」(Mill, J. [8] p. 45, 訳 111 - 12 頁)

しかし，このような徳を育む政治機構はいかにして可能であろうか。ジェイムズは，下記の引用にみられる中間階級にその期待を託した。彼の議会改革の意図は，中間階級に「代表の基盤」を拡大させることで，権力濫用を抑制するシステムを確立するとともに，彼らが世論を導くことで，尊崇の対象を富から「高貴な精神的資質」に転換し，そのような資質が涵養

される社会を構築することにあつたのである。

「中間階級は、科学、技術、そして立法そのものにたいして、光彩をはなつ最も際だった人物を、人間性を高め洗練してきたあらゆるものの主たる源泉を供給しているものであり、もし代表の基盤がそこまで広げられることがあるとすれば、世論を究極的に決定することになる社会階層であることは疑いない。彼らの下にいる民衆のうちの圧倒的多数は、確実に彼らの助言と模範によって指導されることになるであろう。」( Mill, J. [9] p. 32, 訳 181 - 82 頁 )

注目すべきことに、ジェームズのいう中間階級には製造業地帯の産業資本家は含まれていない。そのことは「人口がほとんどすべて富裕な製造業者と貧しい労働者から構成されているために中間階級が極端に少ない、とりわけて不幸な工業地域」( Mill, J. [9] p. 32, 訳 182 頁 ) との記述から明らかである。彼のいう中間階級とは、生活の資を稼ぐ必要のない「中庸な財産 (moderate fortunes)」を所有し、余暇を知的道徳的陶冶に捧げ、「光彩をはなつ最も際だった人物」を排出し、議員として選出されれば世論を究極的に決定する人々である ( cf. Mill, J. [10] p. 65, 訳 56 頁<sup>3)</sup> )。中間階級は知徳を涵養する余暇の存在をその本質とするのであって、利潤の追求に明け暮れている製造業者は含まれていないのである<sup>4)</sup>。

3) 政治経済学への専心と議員としての公的活動を要請する 1815 年 8 月 23 日付のリカードウ (David Ricardo) 宛書簡は、まさにリカードウにこのような中間階級になることを勧告するものであった。「私の大いに望みたいことは、いまやあなたはご家族全部の幸福をはかるに足るだけのたくさんのお金をつくられたのだから、結局腹八分にまさるものはないということでのこの種の獲物には満足し、これからは他の仕事のために余暇を使うということでありたいものです。」( Mill, J. [5] pp. 251-52, 訳 295 - 96 頁 )

4) ジェームズの中間階級概念のコアが余暇の存在であることは、彼の齒に衣着せぬ貴族批判にもかかわらず、その概念が容易に貴族階級を包摂しうることを意味している。事実、彼は、自分が貴族を非難するのは「統治の権力を自分達の間で共有し、悪政の利益をもまた自分達の間で共有する」かぎりにおいてで



民衆にまで選挙権が拡大されても、「民衆が、代表者の適格さ以外の他の顧慮から選ぶ誘因をもたなければ、最も適格な人しか選ばれない」(Mill, J. [14] p. 38) と主張するジェイムズではあるが、彼は決して民衆一般が自らの真の利益の最善の判断者であると思っていたわけではない。彼らの大部分はほとんど余暇をもっておらず判断力を十分に陶冶しえないからである。しかし彼らには、彼らの「意見を形成し、彼らの精神を指導する」(Mill, J. [9] p. 32, 訳 181 頁) 模範とすべき中間階級がいる。この中間階級の存在こそ、選挙権の拡大、あるいは世論の支配に対する彼の楽観的見解の根拠であった。

「現在あるいはこれから先、民衆の中には中間階級の叡智から離れてしまう者もいるかもしれないと言っても、良き統治の基礎に関してなんら意味をなさない。大多数の民衆はこの階級によって指導されることを止めない、と言うことで十分である。」(Mill, J. [9] p. 32, 訳 182 頁)

さらに、「余暇をもっている階級は、気品のある生き方を陶冶するために絶対に必要である」というのは、気品のある生き方は、「生活の資を稼ぐためにその労苦と配慮を注がなければならない人々からは期待すること

---

あると主張する(Mill, J. [11] p. 211)。プラトンを引き合いに出して「生活資料のための労働の必要性から免れている時、人は、自らの本性の最高の卓越性を獲得するための特別な利点をもっている」と論じ、余暇の重要性を強調するジェイムズにとって、「統治の仕事は当然富者の仕事」であるとさえ主張する(Mill, J. [14] p. 37)。民衆が無記名投票によって最も適格な代表者を選ぶようになれば、それは「直ちに富者の利益となる」(p. 38)。というのは、「適格さ」を獲得する余暇を十二分にもっているのは富者だからであり、彼らは名声をつるために「高度な精神的資質」を「獲得し発揮しようと努める」からだと主張する。それゆえ無記名投票という微温的な改革とそれが貴族の利益にもなるという主張(Mill, J. [14]) は、政治改革への貴族の取り込みを図った戦略であるばかりではなく、彼ら中間階級概念から論理的に演繹しうるのである。注9) で見ると、ジョンは、一時期「通常の意味での有閑階級」、すなわち上流階級の性格の再生に商業文明の弊害の是正を期待していたのだが、それもまたジェイムズ同様、余暇の重視からであった。

ができない」からである。それにもかかわらず、「労働階級は、気品あるものを見ていれば、それが粗野なものよりも優れていることを十分に認識することはできる。彼らは、模倣によって、洗練されるのだ。したがって、各々の社会に、彼らが尊敬しうる模範的な品行が存在することが……並外れて重要なのである。」というのも「洗練された生き方、すなわち単純で、気取らない、そして真の洗練に親しむことでさえ、ある種、徳への道に引き込むこと」だからである。このように、「徳への道」こそ、彼の政治改革の核心であったのである (Mill, J. [16] p. 285)。

このような社会のヴィジョンは、ジェームズの経済学にも貫徹している。彼は、『経済学綱要』第2章第2節において、諸階級の貯蓄動機を検討し、いかなる社会においても「蓄積の動機からは中庸な財産以上のものはほとんど生じえないことを証明」(Mill, J. [10] pp. 55-56, 訳48頁)しようとしている。ここでは、ジェームズが理想とする、中間階級が「社会の指導的な部分」として世論を形成している社会について検討すれば十分であろう。

この社会では、年生産物の大きな割合が労働者に分配され、残余が中庸な財産を所有する多数の人々に分配される。ただし、このことが可能であるためには労働者の人口制限が前提されるが、この点については後に検討する。さて、この社会では労働者が快適で愉快的生活を営むのに必要な財を所有している。ジェームズによれば、それ以外の財は「空想にもとづく (fancy)」財にすぎない。この状態においては労働者の貯蓄動機は小さい。なぜなら、不節制な労働者は貯蓄しえないし、節制の資質をもつ労働者は「空想にもとづく」財を購入するために貯蓄しようとはしないからである。つまり「諸々の快樂の正しい評価を下すことができるほど理性を働かせる」労働者は、「合理的な欲求をすべて満たした後に1ペニーずつ加えることによって獲得できる快樂が、我々の想定している環境においては、それらを獲得するために断念しなければならない快樂と等しくないことに気づかざるをえない」からだというのである (Mill, J. [10] pp. 52-53, 訳45 -

46頁)。「断念しなければならない快樂」が、「幸福のより価値ある要素」である「趣味の快樂、知性の行使の快樂、徳の快樂」を念頭においていることは容易に想像されるであろう。

それでは中庸な財産所有者はどうか。彼らは、物質的な享受の点では「最大の財産が賦与しうるあらゆるもの」を獲得している。しかも、名声という富獲得の動機は、この社会においては大きなものとはなりえないという。なぜならば、ジェームズによれば、「たんに独立と物質的享受ばかりではなく、趣味と気品といったあらゆる目的をかなえることができる財産をもち、同時に社会の指導的部分を構成し、さらに社会の意見や娯楽に一般的傾向を与えている人々は、より多量の富の眩さによってその想像力を眩惑させられるような人々の境遇にはない」からである(Mill, J. [10] p. 54, 訳47頁)。議会改革がなされ富と権力の結合が解体されれば、富による名声の獲得という蓄積動機は強力にはなりえない。このような社会において残された貯蓄の動機は、「子供の生活への備えに対する欲求」だけであるが、この欲求は「極めて一般的であることが期待されうるであろうし、それは一定の中庸な資本増加を保障する」がゆえに「蓄積にとって最も好都合」(Mill, J. [10] p. 55, 訳48頁)であるとジェームズは結論づける。このように、欲望が合理的なものに限定されれば、富の追求は穏当なものとなり、それに代わって、知徳と名声との観念連合を媒介に、知徳を陶冶する余暇を享受することが期待されていたのである。

ところで労働階級が中間階級を模倣し知徳を身につけるためには「生存と愉楽に必要なもの」を入手しうる賃金を獲得し、富者に従属せず「独立の感情」を抱きうることが不可欠である(Mill, J. [10] p. 54, 訳47頁)。彼らが貧困状態にあっては、他者の好意的な評価によって知徳を陶冶しようという誘因は存在しないからである。

「偉大な抑止力、すなわち人類の大部分を徳の領域にとどめておく適切な

影響力は、尊敬への愛であり、軽蔑への恐怖である。すなわち人間にとって自然な、同胞の好意的な評価を求める熱烈な欲求と好意的でない評価を考える際の恐怖と戦慄である。……この有益な感情がかなりの力をもって存在するのは、ある程度安楽で快適な状態においてのみである。」(Mill, J. [6] V. p. 537)

賃金は資本と人口の比率によって決定されると考えるジェイムズにとって、労働者が人口制限を行うことは、この「ある程度安楽で快適な状態」を確保するために不可欠である。しかし、労働者の人口制限の目的はそれだけにとどまらない。その目的は、なによりも中間階級の維持にあったのである。その意図は、急速な資本蓄積に対するその消極的な見解に端的に現れている。彼は、立法府が、人々の間に節約の習慣を生み出したり、所得税を課してそれを資本に転化したりして「資本の増加をその自然の歩調以上に速める」(Mill, J. [10] p. 57, 訳 50 頁) ことが可能であることを認めていた。しかし、彼はこのような「資本の強制的蓄積」が劣等地耕作を徒に進展させ利潤率を低下させることで中間階級の維持に支障をきたすことを恐れていたのである。

「この目的 [ 多数の中間階級の維持 ] にとっては、人口が、資本の強制的蓄積によって、土地からの資本に対する報酬が極めて僅かになるまで増進させられないことが絶対に必要である。……社交と、労働の生産物を増大させるあの諸力の結合との双方にとって、好都合な一定の人口密度がある。しかし、これらの便益が獲得されたならば、人口が一層増進することを願う理由はほとんど存在しない。」(Mill, J. [10] pp. 64-65, 訳 56 - 57 頁)

「一定の人口密度」以上に人口を増大させることは、食料生産の困難性を拡大させ、究極的には人類を「食料を生産しそれを消費するという僅か

二つの機能しかもたない極めて低級の動物の群れ」(Mill, J. [7] p. 11) にしてしまう。「知識の領域を増大させ、人間の諸能力と愉楽を増加させうる能力」のある「余暇をもった階級」、すなわち中間階級の存立を脅かす人口増大は、まさに文明の基盤それ自体を崩壊されるものと捉えられていたのである (Mill, J. [7] pp. 11-12)。

それゆえ、ジェームズは、人口制限によって停止状態に入ることをなんら忌避していない。それどころか、なるほど『経済学原理』のジョンのように明示的ではないが、経済的な停止状態に対して積極的な姿勢すら読みとることができるのである。

「出産数の制限は、賃金を引き上げることによって、なんの困難も介入もなしに、我々が望むあらゆることを達成するであろう。その制限は、もしその目的を達成することが可能であれば、労働者の境遇を望まれる快適で安楽な状態に引き上げるばかりではなく、資本の蓄積を完全に阻止するまで押し進めうるのである。」(Mill, J. [10] p. 67, 訳 59 頁)

ジョンは『経済学原理』で「古い学派の政治経済学者」は、富の増加と「進歩性」とを同一視すると述べているが (Mill [34] (2) p. 754; p. 752, 訳 (4) 104; 102 頁), この点からすれば、ジェームズはジョンのいう「古い学派」ではなかったのである。「欲望の誘惑を抑制する力」を獲得し「趣味の快樂、知性の行使の快樂、徳の快樂」を「陶冶」することを「より価値あるもの」と考えるジェームズにとって、なによりも重要であったのは、余暇を知的道徳的陶冶に捧げる多数の中間階級を維持することであった。「分配の自然法則」の作用と人口制限はそのための不可欠な条件であったのである。

「資本に対する土地からの収穫がまだ高い間にこのこと [人口制限] が成

し遂げられるならば、労働者の報酬は豊かであろうし、大きな余剰がなお残るであろう。分配の自然法則が自由に作用することが許されるならば、この純生産物のより大きな部分は、労働の必要から免れ、幸福を享受するとともに最高の知的道徳的資質を獲得するのに最も有利な環境におかれている多数の人々からなる階級の手の中庸な量ずつ渡るであろう。」(Mill, J. [10] pp. 65-66, 訳 57 頁)

知徳の陶冶に励む中間階級と彼らを模倣する民衆で構成される社会を創出することを目指したジェイムズにとって、「富と人口の停止状態」は、『経済学原理』のジョンと同様に、「恐れられ貶められる」状態ではなく、「喜んで入るべき」状態だったのである (Mill [34] (2) pp. 753-54, 訳 (4) 104 頁; p. 756, 訳 (4) 109 頁)。

以上の検討から、ジェイムズの政治改革の意図が権力濫用の抑止だけにあったのではないこと、また経済改革が「生産のための生産」の条件形成にあったのではないことは明らかであろう。なるほど、「統治論」においては、「他のものを犠牲にしても欲望の対象をわがものにしようという人間の性向」(Mill, J. [9] 12, 訳 134 頁) だけからの演繹がなされている。しかし、それは「統治機構を考案し国制の様々な牽制や抑止を決定する際は、あらゆる人は悪漢であり、あらゆる行動において私的利益以外の目的をもっていないと想定しなければならない」というヒューム (David Hume) の方法の継承であった (Mill, J. [15] pp. 279-80)。ヒュームと同様、ジェイムズが「統治論」で前提としているのは、自分の利己的な欲望を自分自身だけでは抑制しえないありのままの弱い人間である。しかし、ジェイムズは、その弱い人間が、観念の「有益な連鎖を精神の中で永続的にするために、快苦の見通しを活用する」(Mill, J. [8] p. 14, 訳 40 頁) 教育を通じて、自己配慮の徳とともに仁愛をも陶冶しようとの確信を抱いていたのである。

ジェイムズは、「アダム・スミスによって雄弁に記述されたが説明され

なかった、我々の本性のあの顕著な現象、すなわち適切に教育された人々においては、称讃に値すること (Praiseworthiness) への愛、非難に値すること (Blameworthiness) に対する恐れが、実際に称讃されることへの愛や実際に非難されることに対する恐れよりも強い感情になる」ということを「連想の力によって、二次的な感情が一次的な感情よりも強力になる」事例として説明しようと確信していた (Mill, J. [13] II. p. 298)。したがって、この観念連合を形成する「教育は、個人を、彼自身に対してだけでなく、他者に対してもまた、幸福の可能な限り最高の制作者にするための手段」(Mill, J. [8] p. 16, 訳 44 - 45 頁) なのであり、政治機構はその要石と位置づけられていたのである。政治改革によって、富と名声との強力な観念連合が断ち切られれば、さらに「自らの財産を遺贈しようとする人に残せないとか、あるいは自らの財産が、自分との関係の近さが同じである人々に平等に配分されえない」「分配の自然法則に加えられた不自然な抑制」(Mill, J. [16] p. 285) が解消されれば、「蓄積の自然法則」が貫徹し富の追求を穏やかなものへと変化させようであろう。欲求の主要な対象が富貴から知徳へと転換する社会、余暇を知的道徳的陶冶に捧げる多数の「中庸な財産」所有者と彼らを模倣する高賃金の労働階級で構成された社会、それが「分配の自然法則」と「蓄積の自然法則」の貫徹を望んだジェームズの意図であったのである<sup>5)</sup>。

- 
- 5) ジョンの停止状態論に孤独の重要性などロマン派の影響が認められることは言うまでもない。しかし、次の言説を読むとき、ジェームズの思想が息づいていることは直ちに了解されるであろう。

「我々は、個人の慎慮と節儉と、大きかろうが小さかろうが自らの勤労の成果に対する個人の正当な請求権と一致する限りでの財産の平等を促進する立法の体系、これら二つの結合した効果によって、このようなより良い財産の分配が達成されると考えうる。たとえば……いかなる人であれ遺贈や相続によって獲得しうる金額を中庸な独立して暮らしていける収入 (moderate independence) をなすのに十分な量に制限することを考えうる。この二重の影響力の下にあれば、社会は次のように主要な特徴を示すようになるであろう。すなわち、高給で豊かな労働者層が存在するとともに、一生涯の間に稼ぎ蓄積したものを除け

ジョンは後年「ベンサム論」で、ベンサム (Jeremy Bentham) は人間を「精神的な完成を一つの目的として追求することができる存在」とは認めなかったと厳しく批判した (Mill [32] p. 95, 訳 257 頁)。以上の検討から明らかのように、このような批判をジェイムズに向けなかったのは父への配慮からだという解釈は到底受け入れられるものではなく、ジェイムズの思想からして、そのような批判は当たらないことをジョンは十分に認識していたのである<sup>6)</sup>。

## II - 2 「伝道」時代のジョン・ステュアート・ミル 討論の自由と知徳の陶冶

1828年頃までの「伝道」時代のジョンもジェイムズと同様の改革のヴィジョンを描いていた。

まず、ジョンも、ジェイムズと同様に、製造業者に政治改革を期待したわけではない。なぜならば、「富者の両陣営、地主と製造業者は、前者は高い地代のゆえに、後者は低い賃金と高い利潤のゆえに過剰人口に利益を

---

ばいかなる巨額な財産も存在しないが、しかし現在よりもより多くの人々が、劣悪な労苦を免れるばかりではなく、機械的な煩雑さから肉体的にも精神的にも解放され、気品ある生を自由に陶冶し、その成長に不利な環境にある諸階級に気品ある生の模範をあたえうる余暇をもつことになるであろう。経済的に考察しても最も望ましい社会状態と考えられるこのような事態は、停止状態と完全に両立しうるばかりではなく、他のいかなる状態よりも停止状態と最も自然に結びつくであろう。」(Mill [34] (2) p. 755, 訳 (4) 107 - 08 頁)

- 6) ジョンは「ベンサムの哲学」でも次のようにベンサムを批判するが、彼にとって、父ジェイムズは、ベンサムと対照的に、「利己的な生」を変更しようと見なすモラリストの一人なのである。

「真に靈感に動かされたモラリスト ソクラテスやプラトン、あるいは(神学的見地ではなく人間の見地からの)キリストのようなモラリスト によって力づけられ鼓舞される必要のある人々に対する、ベンサム氏の著作のような書物の影響は、もしそれらが読まれ信じられ、そしてその精神が吸収されるならば、彼らを絶望的な意気消沈と憂鬱に陥らせるか、あるいはあの惨めな利己的な生に無頓着に没頭させるかに違いないのである。というのは、そこでは、そのような生が自分達の根源的で変更しえない本性に固有なものだと教えられるからである。」(Mill [28] p. 16, 訳 184 頁)



見出す」のであり、彼らはともに「労働階級を救い難い貧困状態に止めておくことに明白な利益をもっているからである。これらの紳士達は民衆の大部分が1日14時間働くことを強いられている間は、彼らの注意を政府の権力濫用に向けることができないことを知っている」からである（Mill [19] p. 84, 訳 119 頁）。

またジョンも、民衆が自らの真の利益を必ずしも正しく理解しうるとは考えていなかった。しかし民衆は「自らの利益の追求には熱心であり」、またそれを実現してくれる「善き代表」を選出することは難しくないので、「無能な民衆でさえ一般に彼らの間の最も賢明な人々によって導かれる」はずであった。しかも「政治学の根本的な諸原理は表層にあるのであって、それらを理解するのになんら特殊な能力も必要ではない」（Mill [22] pp. 381-82）。労働階級が簡明な人口の原理を理解し人口制限を行えば、快適な暮らしに必要な富を獲得するとともに、「彼らの注意を政府の権力濫用に向けうる余暇をもつ」（Mill [19] p. 80, 訳 113 - 14 頁）ことが可能になる。なるほど「私心のある人々や無知な人々の偏見」は存在する。しかし、「もし公正な扱いをうければ、真理は常に最終的に誤謬に打ち勝ち、世論になるということは、人間本性の最も明白な諸原理に依拠した……命題である」（Mill [20] p. 8）とジョンは強調していた。「公平な扱い」とは自由な討論に委ねるということである。「自由な討論こそ真理の普及に貢献する」。「討論の後で民衆は、自らの意見を、十分な確信とそれらの意見を根拠づけている証拠の完全な知識とをもって保持するのである」（Mill [18] pp. 10-11, 訳 97 - 99 頁）。

ジェームズの教育と思想に対する反撥と理解されることの多い「精神の危機」の後においても、ジョンは、依然としてジェームズと同様の社会改革のヴィジョンを持っていた。ジョンは、「完成可能性」（1828年）において、人間の道徳的進歩への確信を表明した後で、人間が道徳的な卓越性を達成する要因を、「幼少期における立派な道徳教育の始原的な影響力と、

後年における彼らの習慣と観念連合に及ぼす世間、社会、そして世論の感知しえない影響力」に求めている。「これら二つの力、すなわち教育と世論が、ともに十全に作用し互いに調和して作用するならば、高度な道徳的卓越性を生み出すことができる」(Mill [23] pp. 430-31, 訳244頁)という。しかし、現実にはこれらの影響力は劣悪である。イギリスでは、「富を唯一の望むべき対象にし、貧困をほとんど唯一の恐怖すべき災いにしている政治制度」によって、富者が「公衆の精神に影響力を行使する」。つまり、「大多数の人々が、富者の恩寵を求め、行動を模倣し、その意見を採用するのであり、富者の考えに感化される」。したがって「野心の大きい対象は、高度の知的道徳的卓越性に対する報酬であるべきなのだが、この国においては富に対する報酬」となっている。この政治制度を改め、「民衆の賛意によって与えられうる権力を除いていかなる権力も誰も持ちえないような一国の政治制度を組織すること」が「我々が熱望する一般的道徳の高貴な状態」を生み出す上で不可欠な条件であるとジョンは主張する(Mill [23] pp. 431-33, 訳245 - 49頁)。ジョンも、政治改革の目的を、権力濫用の抑止だけではなく、知徳が陶冶される社会の形成においていたのである。

このようにジョンは、ジェームズと同様に、政治機構を人々の知的道徳的陶冶の主要な契機として位置づけていた。富の過度な追求がなされるのは、貴族支配の政治機構が生み出す富と名声との強力な観念連合によるものであった。それに対して、「民衆の賛意」に基づく代表制度は、知徳と名声との観念連合を作り上げることで、富の追求を快適な暮らしに必要とされる程度に緩和させ、知徳を涵養する社会をつくるであろう。そして、その政治改革を指導するのは、ミル父子のように余暇を知徳の陶冶に捧げる人々ということになる。なるほど彼らは、貴族支配の政治機構の下では、最初は少数派にとどまるであろう。しかし、討論の自由が真理を普及させ、彼らはやがて多数派となり世論を変革し貴族支配の終焉をもたらすであろう。民衆は彼らを自らの指導者として、そして模範として仰ぐであろう。

そのとき、ミル父子が理想とする知徳がそれにもみ相応しい尊敬と讃美の念とをもって評価される社会が実現するはずであった。

### ジョン・ステュアート・ミルによるリベラリズム批判 知的 道徳的権威の確立の課題

討論が真理を普及させると考えていたジョンであるが、1829年のロンドン討論協会におけるスターリング (John Sterling) との激しい応酬をほぼ最後にして協会への出席を止めてしまった。それ以降、彼は、貴族支配の政治機構を改革するだけでは、人々が知徳の涵養に勤しむ理想的な社会が形成されるとは考えなくなる。その変化をもたらしたのは主に次のような認識の変化によると思われる。まず、第一に、たしかに貴族支配は人々を富の過度な追求に趨らせているが、しかし統治形態が変わっても商業精神が優勢なところでは富の追求に生の目的が向かってしまうことを認めざるをえなかったこと、第二に、商業精神が、教育や文筆 (literature) という世論を導き知徳の陶冶を支援する領域に侵入すると、かえって人々の知的道徳的腐敗を助長してしまうと認識したこと、そして第三に、政治的道徳的真理に関して民衆の信従しうる権威が不在であるところでは、民衆は尊重すべき道徳的価値を見出しえず、利己的な富の追求に趨り、商業精神による腐敗を助長すると判断するに至ったことである。討論の自由は、意見の一致による知的権威を創出しえないことを討論協会の経験を通じて痛感したのである。しかし、このことは裏を返せば、この権威が確立されさえすれば、民衆は自ずと信従し、富の過度な追求に趨ったりせず知徳の涵養に勤しむと楽観的に考えていたことをも意味していたのであり、この時期のジョンが方法論の構築に力を注いだのはまさにこの知的権威を確立するためであった。以上の点を本節では明らかにする。

ジョンは、1829年5月15日付の書簡の中で、ディシュタール (Gustave d'Eichthal) がイギリスの経済的優越を「正当な評価を超えて称讃してい

る」と指摘し、その優越が「あらゆることを蓄積の犠牲にしようとする気質とそれに伴う他のことには目もくれないあの利己主義」( Mill [39] (1) p. 31, 訳320頁)と不可分であることに彼の注意を喚起している。ジョンによれば、「商業精神は、そのあらゆるよい効果にもかかわらず、それが優勢なところはどこでも、ある程度この弊害をもたらす」として、「快適な暮らしに必要とされる程度を超えた富の追求および自分と自分の家族だけのための活動が人生の主たる目的となると、ほとんど必然的に彼の共感と関心は自分と自分の家族を超えられなくなる」との認識を示している。中間階級が「彼らの目上の者を模倣するというただ一つの生の目的しかもっていない」原因は、富貴を尊重する風潮を生み出す貴族支配だけでなく、商業社会それ自体に胚胎していると認識するに至ったのである ( Mill [39] (1) p. 32, 訳320 - 21頁)。中間階級という用語はもはや知徳の陶冶を遂げる主体としての積極的な意味を失い、商業精神を体現する階級という意味で用いられるようになる。

ジョンは31年に公表した「文筆への攻撃」で、「民衆は、貴族と同様に、彼らを改善させようと努める人々よりも、彼らの感情に調子を合わせる人々を好む」と断定し、「選挙法改正後も、それ以前と同様に、人間を悪徳と弱さをもった現在あるがままのものと見做して、彼らの腐敗した好みを喜ばせるような食べ物を与えることのほうが、彼らの趣味と気質をより健全な滋養物に適するように陶冶することよりも、容易で儲かることになる。そして、そのようなことが全ての文筆の性格になる」( Mill [26] p. 326)と指摘している。このようにミルは、商業精神が、本来民衆の知的・道徳的な進歩に貢献すべき文筆という領域に侵入すると、貴族支配を終焉させると期待された「選挙法改正後」においても、文筆は、世論を改善に導くよりも、むしろ民衆に阿ると認識するようになった。民衆は自らの真の利益を啓発してくれる指導者ではなく、自らの好みに迎合してくれる人々を受け入れる。政治機構が改革されても、それだけでは民衆の知的道

徳的陶冶はなされないと考えざるをえなくなったのである。

33年に公表された「公共財団と教会財産」における基本財産による教育施設擁護論もこの認識に基づいている。大学や教会等の基本財産は、本来「イギリス国民の精神的修養のための信託財産」であり、信託受益者である国民の財産である。その財産が本来の目的を果たさず濫用されているならば、それを聖職者達の手から取り戻すことは財産権の侵害にあたるものではないとジョンは主張する。コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) の国民財産 (Nationalty) による学識者集団 (clerisy) の維持という思想に影響を受けたこの議論は、学識者への商業精神の浸透に対抗するために、後に述べる精神的権威の確立を目的とする高等教育機関の創設と維持を意図したものである。基本財産の教育施設は「怠惰と非効率を奨励する」とのアダム・スミスの批判に対して、ジョンは、その弊害は基本財産による運営それ自体にあるのではなく、受託者の義務履行の監視を怠ることに起因するものだと主張する。彼によれば、「スミスの理論が想定したように、親たちが、教育の役割の真価を正しく判断しようと熱心に努め、かつそのような能力を十分にもっている」ということはない。それゆえ、「最も浅薄な術策にすぐに騙され易い」のであり、教師のほうも「せいぜい体面を繕えばいいという程度のほんの僅かな労力ですでに多くの金銭を得ようとする欲求」や「親たちの機嫌をとっておく必要から、教育をより良いものにするどころかより劣悪なものにする」。このため「真の教育をしようと努める学校教師は……ほとんど確実に失敗する」から、教師は、見かけの教育をする「単なる商人教師」に墮落してしまう。したがって「金銭的な利得以外の動機から、精神的欲望にとって善き健全な糧を提供しようと努力することは……時と所とを問わず不可避である。というのは、単なる商業市場の競争は一般的にこのような糧とははなはだ無縁の代用品しか与えないからである」と主張する (Mill [27] pp. 214-15, 訳 264 - 66 頁)。このように、学校教育が「商業市場の競争」に委ねられると、無知で甘言に惑

わされやすい民衆とその弱さにつけこむ「商人教師」とによって「精神的欲望にとって善き健全な糧」とは無縁の代物となると認識するに至ったのである。

このような認識から、ジョンは、「あらゆる社会的弊害の主要かつ永続的な源泉は無知と修養の欠如である」が、それは「政治的抑制の最も巧みな体系によっては取り除かれない」のであって、「統治の地位においてであれ私的な地位においてであれ、人類の精神にこの欠落についての意識を覚醒させ、それを満たす手段を彼らに助成しようとする、教育ある陶冶された人々の不断的努力」によってのみ取り除かれると結論する（Mill [27] pp. 213-14, 訳263頁）。確かに、「教育ある陶冶された人々の不断的努力」によって「無知と修養の欠如」が取り除かれるという論点は以前の主張の継承といえる。ジェームズも「伝道」時代のジョンも「教育ある陶冶された人々」が、討論の自由を武器に、真理を普及させ世論を導くことで、貴族支配を終焉させる政治改革を断行すれば、「我々が熱望する一般的道徳の高貴な状態」が実現されると展望していた。「教育ある陶冶された人々」がジェームズの間段階を継承した概念であることは明らかであろう。しかし、ジョンが新たに認識したのは、「政治的抑制の最も巧みな体系」が実現しても、このような「教育ある陶冶された人々」は「商業市場の競争」の下では、民衆の指導者になりえないという問題であった。

むしろ、民衆が迎合を求めるとすれば「民衆の賛意」に基づく代表制度自体が変質してしまうであろう。ジョンは、1830年には「代表制統治の真の意味は……代表者が自分自身の最良の判断に従って立法することであり、彼の選挙人の指示にしたがって、あるいはたとえ世論であっても、それにしたがって立法することではない」ことを強調するに至っている。その背景には、「主人」として振舞う民衆が、代表者を「召使」とし、統治を自らの卑近な利益の実現の場にするに對するジョンの危惧の高まりがあったことは言うまでもない（Mill [24] p. 150）。

ところで留意すべきことは、当時のジョンは、以上のような弊害の究極的な原因を「より教育のある陶冶された人々」の意見の分裂、すなわち民衆が信従しうる政治的・道徳的権威の不在にもとめていたことである。1831年の「時代の精神」において、彼は現代を「教育ある人々の分裂が彼らの権威を無効にし、無教育な人々が彼らに対する信頼感を喪失している」過渡期と規定している。彼によれば、自然科学の領域では、民衆は、たとえ個人的判断の権利をもっているも自らの判断で命題の真偽を決定せず、意見の一致に到達している有識者の権威に従っている。「自然科学にとって過渡期は過去のものとなっている」。しかし、人間と社会の科学の領域では、有識者の意見の不一致のために、そのような精神的権威が存在せず、知的混乱状態に陥っている。「一般大衆は指導者がいない状態であり、社会は、知識のいかなる部門も包括的にしかも全体として学んだことのない人々が、知識の特定の部分を自分自身で判断しようとする時に予想される全ての誤謬と危険に曝されている」と論じた（Mill [25] pp. 238-39, 訳 56 - 58 頁）。この権威の不在が、上記のような「商人教師」や民衆に迎合する文筆家を闊歩させているとジョンは判断したのである。

この意見の一致の不在を、ジョンは、おそらくロンドン討論協会でのコウルリッジアンなどの非功利主義諸思想との交流を通じて痛感したと思われる。「道徳の第一原理」のような最も明白で単純な真理に対しても、「最も高度な教育のある人々でさえ……満足に解答するのに少なからぬ困難を感じる反論」が提出される。したがって、「これらの詭弁が中途半端な教育しかない人々　しかもあらゆる階級の多数者にそれ以上になることを期待することはできない　の判断に委ねられたならば、その虚偽が発見され理解される」ことはない。また、「自分自身の力だけで全てのことを判断しようと固執するならば、巧妙で奸智に長けた詭弁家が彼らにその証拠に対して疑問を抱かせることに成功しないような真理は存在しない」（Mill [25] pp. 243-44, 訳 62 - 63 頁）。

以前のジョンは、「討論の後で民衆は、自らの意見を、十分な確信とそれらの意見を根拠づけている証拠の完全な知識とをもって保持する」と主張していたが、もはや自由な討論によって真理に到達しようという確信を喪失した。それは、討論それ自体が「批判精神 (*esprit critique*)」に立脚しているという認識からであった (Mill [39] (1) pp. 45-46; p. 30, 訳 310 - 11 頁)。批判精神は、古い社会を支えている誤謬や偏見を剔抉し社会を破壊することはできても、古い社会が温存させている秩序維持の条件という半真理を認めない。つまり批判精神は、秩序にとって不可欠な共通の価値規範に対する民衆の確信を動揺させ、彼らを懐疑と不安の中に陥れ、利己的行為に趨らせてしまう。こうした視点から、ジョンは、キリスト教に対する信仰を弱めることに対しても、「人々に何らかの効果的な代替物を与えるという将来の可能性さえもたずに、義務について人々がもっている唯一の確固とした確信と感情を揺るがすことによって、人々を善良にする代わりに一層腐敗させる」として批判を加えるに至るのである (Mill [39] (1) p. 76)。こうして自らの半真理に固執する批判精神は、「古い教説が支配的であった時に誇ることができた全員一致に比すべき同意」を形成しえず、したがって権威となるべき総合的な知に到達しえず、むしろ「知的混乱状態 (*intellectual anarchy*)」を助長する (Mill [25] p. 233, 訳 53 頁)。「真理は批判精神以外いかなる敵も持たない」(Mill [39] (1) p. 46) との極めて厳しい攻撃はこのようなジョンのあらたな認識から発せられたのである。

すでに述べたように、ミル父子は民衆が自らの利益を正しく把握しようとは考えていなかった。それにもかかわらず彼らが世論の支配を支持しえたのは、民衆が模範たる指導者に自ずと従うという楽観的な展望があったからである。しかし、その指導者たるべき人々の見解は分裂し権威は存在しない。そのような権威不在の下で、リベラリズムが奨励するように、民衆が共通の価値規範さえ懷疑し「自分自身の力だけで全てのことを判断しよう」と固執するならば、道徳的墮落をむしろ促進することになる。この



時期のジョンのリベラリズムに対する極めて痛切な批判はこのためである。

「リベラリズムはあらゆる人を自分自身の指導者に、主権者にすることを支持しますし、自分自身で考え、自分自身にとって最良であると自ら判断したまさにその通りに行動させ、他者が証拠によって説得することは自由にさせますが、権威に服することを禁じます。さらに、あらゆる人の身体と財産の存在とかなりの安全とが不可避免的に必要としている以上に他者が彼を拘束することを許容しません。人間の本性について、また人間の幸福にとって何が必要であるかについて、さらに人間はどの程度の幸福と徳を獲得しうるかについて、この体系が示しているほどの無知を考えることは困難です。」(Mill [39] (1) p. 84)

こうして、ジョンは精神的権威を確立し過渡期を克服するための方法論の構築こそ最重要の課題と位置づけることになった。31年10月のスターリング宛書簡で、「意見のほとんど全ての違いは方法の違いである」から、「方法の問題に最も光を投げかけうる人が、その時代の最も進んだ知性と徳をもつ人々との間の同盟を促進することに最も貢献する」と記している(Mill [39] (1) p. 79)。ジョンはこの方法を「実践的折衷主義 (practical eclecticism)」と呼んだが、それは「哲学することと討論することの正しい方法」(Mill [39] (1) p. 42) と規定されているように、半真理を総合する科学方法論であるとともに、「最も進んだ知性と徳をもつ人々の間」に敵意を生み出すこれまでの論争的討論ではなく、彼らの間に共感を生み出すことを目指した方法論であった。それは「人々の誤った意見を攻撃することではなく……人々が今までその一面しか見てこなかった真理の他の半分を彼らに与えること」であり、そうすることで、「誰も真理の採用を敗北の考えと結びつけず」、「論争の激情と勝利の願望によって」自らの半真理に固執し他者の意見に含まれる真理を拒否する態度を解消し、共感を生み出すこと

を意図している。「この方法によって、明確に私自身の見解の中に完全な真理を包括し、他の人々に彼らが以前その一部しか知らなかった完全な真理を提示することができる時、私は彼らが最後にはそれを採用すると大いに確信しています」とあるように (Mill [39] (1) pp. 45-6)、「教育ある階級によって満場一致で採用される」完全な真理の上に「国民的信条を築く」(Mill [39] (1) p. 77) ことが実践的折衷主義の主要な目的であったのである<sup>7)</sup>。

---

7) したがって、知的権威の必要性を強調し、リベラリズムを批判したこの時期のジョンを、「個人的自由の情熱的な闘士」からの一時的な逸脱とみなす見解 (Ten [43] pp. 169-70: p. 173) を支持することはできない。知徳が尊崇される社会を築くためには何が必要かという視点でジョンの思想は一貫しているのであって、本文で引用した意味でのリベラリズムで一貫しているわけではない。民衆の信従すべき権威の必要性が、成熟期のジョンの思想においても保持され続けたことは、1865年の『コントと実証主義』における下記の引用を瞥見することでも確認できる。

「疑いもなく、自分達が関わっている諸問題を特別に研究してきた人々の権威に信頼を置いて自らの大抵の意見を受け取るということは、人間の必然的な状態である。最も賢明な人々でさえ、自分達が完全には精通していない諸問題については、これと異なった準則に従って行動できるわけではない。いわんや大部分の人間は、あらゆる思想上ならびに行動上の重大な問題についてつねにこのような準則に従ってきたのであり、彼らはその根拠を知ることはないし、しばしば理解することさえできない意見に暗黙の信頼を置いて行動してきた。彼らは、自分達の自然な指導者の意見が一致しているかぎり、それらの意見を完全に信頼しているのであり、ただそれらの意見が分裂するようになり、彼らが判断しうるかぎり等しく有能である教師達が矛盾した意見を公言するに至った場合にのみ不安になり懐疑的になるのである。」( Mill [37] pp. 313-14, 訳 102 - 04 頁)

『自由論』でも彼は人類が進歩するにつれて論争の余地を残さぬほどの確実さに到達した真理の数と重要性に人類の幸福は依存していることを、したがって、「意見の相違の範囲が徐々に狭まることは、不可避的で不可欠である」( Mill [35] pp. 250-51, 訳 89 - 90 頁) と主張している。しかしで述べるようにジョンは1840年代以降、知徳を蔑視する凡庸の支配を恐怖するようになった。「真理の生き生きとした理解」を確保するために確定された真理に対してもあえてその異論の必要性を強調するに至らせたのは、凡庸の支配に対抗するという課題であったと思われる。

#### IV 凡庸への対抗としての卓越した人々の個性

ジョンは、知的道徳的権威が確立されれば、民衆は自ずと権威に信従し知的道徳的涵養に勤しむという楽観的な展望を遅くとも 1840 年に公表した「トクヴィルのアメリカのデモクラシー」において放棄せざるをえなくなる。本節ではそれまでの彼の社会認識を検討し、その放棄に至らざるをえなくさせた契機を検討したい。

35 年の「トクヴィルのアメリカのデモクラシー」では、トクヴィル (Alexis de Tocqueville) が境遇の平等という意味でのデモクラシーに伴う弊害として指摘した多数者の圧制について、ジョンは「教育、知識あるいは洗練において普通の水準をはるかに越えていて、他の人々に、際だった精神的卓越に対する尊崇の念を抱かせ、自分達の叡智が不十分であることを有益に感じさせる、大きな集団が存在しない」アメリカに特有の問題と捉え (Mill [29] p. 84, 訳 166 頁)、教育のための基本財産と有閑階級の存在する国では、世論の圧制に対抗する大きな保障があると楽観的な展望を抱いていた。

「有閑階級は、思想の個性を享受することを自分自身で守るのに十分であるだけではなく、他の人々にも勧めるのに十分な力を常にもつてであろうし、多数の人々の目の前に、彼らにとって極めて重要であるもの、すなわち彼ら自身よりも優れた精神的陶冶の模範を示し続けるであろう。そのような階級はまた、団結によって、自分達の意見に、他の公衆が注目せざるをえなくするであろう。……我々は、有閑階級の存在の中にデモクラシーが陥りがちなあらゆる不都合に対する重要で有益な矯正手段を見出すのである。」(Mill [29] pp. 85-86, 訳 168 - 69 頁)

この有閑階級がジェイムズの間階級を継承した概念であることは、36

年の「アメリカの社会状態」からも明らかである。そこで彼は、「有閑階級、すなわち余暇に教養を培ってきた階級」を「社会進歩の高貴な道における国民の自然な指導者である、国民の中の重要な部分」とし、「莫大な収入をもつことは必要でもないし、望ましくもない」が、「生涯の最良の年月を生活資料の獲得に費やす必要から免れている階級」であり、「洗練で気品のある社会生活は言うに及ばず、哲学とより高貴な種類の文筆においてあらゆる際だった卓越」を生み出す階級と規定している (Mill [30] pp. 99-100)。彼らはロンドンやエディンバラという「文芸と社交の大都市」(Mill [30] p. 101) に居住する「文芸の共和国 (the republic of letters)」(Mill [30] p. 94) の住人であり、他の人々に知的道徳的陶冶の模範を示し続ける階級なのである。

しかし、他方で、ジョンは「アメリカの社会状態」以降、「世論の支配」に対する危惧を増大させていく。彼が「アメリカは田舎者の中間階級で満ちた共和国 (republic peopled with a provincial middle class) である」(Mill [30] p. 101) というとき、「田舎者らしさ (provincialism)」は、「あえて自分自身であろうとしない」模倣性を、独創性のなさを意味し、それが商業文明の進展によって増大する中間階級自体の特徴として認識されていく。ジョンは、中間階級の特徴を次のように記している。

「ポンド、シリング、そしてペンスに直接に変えることができない種類の知識と精神的陶冶に対する一般的無関心、自然の中の美にしろ、天才の作品の中にある美にしろ、美に対する認識の欠如と愉楽の欠如、またあたかも美に対する認識をもっているかのような振る舞いであり、そして支配的な情念は、お金に対する情念であり、それ以外の情念を何も持っていない人の情念である。洗練や優雅さそれ自体に対する無関心、しかし他の人々によってそのようなものと認められているものを所有したいという熱烈な欲求である。」(Mill [30] pp. 101-02)。

知的道徳的陶冶に対して無関心な、さらに洗練や優雅さに対する無関心な中間階級の模倣は、「称讃に値することへの愛」に昇華するものではなく、「他の人々によってそのようなものと認められているものを所有したいという熱烈な欲求」、すなわち見かけに対する欲求からなされるにすぎない。この知的道徳的さらに美的陶冶に無関心で見かけの価値だけを追求する中間階級が、知的道徳的権威に信従せず、「数の権威」として世論を支配することは何を意味するであろうか。スミスは、「自己規制の偉大な学校である世間の雑踏と出来事の中で」(Smith [42] p. 146, 訳(上)426頁)育った人々は、相互的同感の喜びを享受するために、公平な観察者を内面化することを学び、正義の遵守を中核とする互いの振舞いに対する抑制力を獲得すると主張した。そして、長期にわたる交際が見込まれる環境において、人々は社会的評判を維持するように促されると考えた。それゆえ商業社会における「中流および下流の身分」にあっては「幸いなことに」「徳への道と富への道」はほぼ一致していると主張することができたのである。スミスにとって、振舞いを適宜性へと引き付ける磁場は中庸 (mediocrity) としてポジティブな意味を担っていた。すなわち、「我々自身に特別に関係する諸対象によってかき立てられるあらゆる情念の適宜性、すなわち観察者がついていける調子の高さが、ある種の中庸 (mediocrity) にあるにちがいないことは明らかである」(Smith [42] p. 27, 訳(上)69頁)。ジョンもまたスミスと同様に「世論の体制 (régime of public opinion) が少なくとも無作法な悪徳には反対するのであり、そのような抑制力が力をえて、一定の階級や個人がその抑制力から事実上免除されることがなくなるので、このような変化は、外面的な礼儀作法にとって大いに好ましい」ことを認める。しかし、他方、彼は、富と徳の両立は、「世論がその最も有益な影響力を行使する」ことのできる「全ての人がお互いに知り合っている小さな社会」においてのみ可能であり、発達した商業社会では山師的な行為や見かけの価値の横行が「不可避的な結果」として伴うとし「抑制力としての世論の

効力の減退」が避けがたいと判断せざるをえなくなった (Mill [31] p. 132-33, 訳 200 - 02 頁<sup>8)</sup>)。さらに世論が知的道徳的陶冶に無関心な中間階級の「数の権威」となると、世論の磁場である mediocrity は凡庸と化し、知的道徳的卓越性を模範とするのではなく、むしろ卓越した人々の個性を自らに強力に引き寄せ圧殺してしまうのではないか。知性と徳を重んじるモラリストであるジョンにとってそれは何よりも恐怖すべきことであったであろう。

この認識ともなって有閑階級は商業文明の凡庸がもたらす「中国的停滞 (Chinese stationariness)」（Mill [33] p. 188, 訳 177 頁）に対抗する勢力として位置づけられることになる。しかし、47年4月には「通常の意味での有閑階級が最高の社会形態の必須な構成要素であると考えなくなった」と

---

8) この点については、宣伝と見かけが重視させる大都会での商業ばかりではなく、破産に対するアメリカの世論の寛大さもジョンに与えた影響が大きいと思われる。金銭中心の「中間階級の思考習慣と思考方法」は「最も冒険的な精神」を商取引において優勢にする。それが破産に対する寛大さを生み出す (Mill [29] pp. 102-03)。こうして「破産は不名誉なものと思われなくなっている。なぜならば、破産は、もはや不誠実か軽率であることのできる確かな証拠ではなくて、いるからである。すなわち、破産が依然として招いている不名誉は、悲しいかな！ 貧乏の徴としての不名誉に属しているのである。このように、世論は、功罪の分かりやすい基準のもう一つを失ってしまったのであるが、これらの基準にだけ世論は正しく適用することができるのである。そして世論を全体として万能にしてきた原因そのものが、世論の判断が個人に与える正確さと力を弱めているのである。」(Mill [30] pp. 132-33, 訳 200 - 02 頁)

9) ジョンが「文明論」や「トクヴィルのアメリカのデモクラシー」で上流階級の再生に商業文明の弊害の是正を託していたとしても、注4) でみたように、ジェイムズの余暇重視の思想からすれば驚くに値しない。しかもその再生の方法も、依然としてジェイムズと同様の手段を、すなわち「高貴な精神的資質」と「名声」との習慣的な観念の連鎖の形成を踏襲していた。「社会が提供することができる唯一の外来的な動機は声望と社会的な重みであり、功績を奨励するためにはできるだけこれを利用しなければならない。社会的諸変化が上流諸階級の改善のためになしうる主要なことは、そして、それはデモクラシーの進歩が少しずつ、しかし確実に成就していることであるが、徐々にあらゆる種類の劣せずついて得た優遇をなくして、名誉と支配的立場へ開かれた唯一の道を個人的な資質の道にすることである」(Mill [30] pp. 146-7, 訳 221 頁)。

47年4月に「通常の意味での有閑階級」に期待しなくなった理由をジョンは次のように述べている。「彼ら〔イギリスの上流階級〕は、精神を何等かの

し、特定の階級に凡庸化への対抗力を期待しなくなる<sup>9)</sup>。彼は「真に陶冶された人物」という少数者に期待せざるをえなくなる。「単なる平均的な人間からなる大衆の意見がどこでも支配的な力となり、あるいはなりつつあるようなときには、この傾向を相殺し矯正する働きをするものは、思想的に卓越した高みに立つ人々の、ますます際だつ個性であろうと思われる」(Mill [35] p. 269, 訳 135 頁)。ハイエク (Friedrich August von Hayek) はジョンの『自由論』にドイツの知的伝統に根ざした個性崇拜の影響を指摘したが (Hayek [3] p. 26, 訳 32 頁)、その個性の強調は知徳が尊重される社会というミル父子のヴィジョンの帰趨であったといえる。以降、モラリストのジョンは、「凡庸を優勢な力」にするのが「世界全体の一般的傾向」として認めながら (Mill [35] p. 268, 訳 133 頁)、いかにすれば「大衆、すなわち集団的凡庸」が、知徳を尊敬と讃美の念とをもって評価する存在となりうるかという難問を抱え込むことになる。

[ 参 考 文 献 ]

- [ 1 ] Fenn, R. A., *James Mill's Political Thought*, New York & London, 1987.  
 [ 2 ] Godwin, William, *An Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on General Virtue and Happiness*, 2 vols, 1793, London.  
 [ 3 ] Hayek, F. A., "Individualism: True and False", in *Individualism and Economic Order*, Chicago and London, 1948. 「真の個人主義と偽の個人主義」 (田中真晴・田中秀夫編訳 『市場・知識・自由 自由主義の経済思想』 ミネルヴァ書房, 1986 年, 所収)。

---

目的のために働かず習慣をまったく欠落させているために、他の諸階級に広がっている、極めて平凡な知性すら、また極めて平凡な意志と性格すら情けないほど欠いています……。私は父親と同様に、(彼の民衆鼻窟にもかかわらず) 彼らの政治的独占が取り除かれれば、彼らは競争者達よりも抜きん出るために、懸命に努力するように促されるであろうと期待しておりました。しかし、私はそう考えるのをすっかりやめてしまいました。こうして、ジェイムズと同様に (Mill, J. [14] pp. 37-38)、貴族は十分な余暇をもっているのに政治的独占が取り除かれれば「懸命に努力する」と考えていたジョンは、貴族は克服すべき困難をもっていないがゆえに「精神的な活力」を失ってしまっていると判断するに至ったのである (Mill [39] (2) pp. 712-13)。

- [ 4 ] Marx, K., *Das Kapital I, Marx-Engels Werke*, Bd. 23-I, Berlin, 1962, マルクス = エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』大月書店, 1974年.
- [ 5 ] Mill, J., Letter to Ricardo, 23 Augt. 1815: in *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, vol. 6, Cambridge, 1973: 中野正監訳『リカードウ全集 書簡集 1810 - 1815年』雄松堂書店, 1977年.
- [ 6 ] Mill, J., *The History of British India*, in 6 vols. [1817] 3rd edition, London, 1826.
- [ 7 ] , “Colony,” (Feb. 1818): in *Supplement to the Encyclopedia Britannica*, London, 1825: in [17].
- [ 8 ] , “Education,” (Jan. 1819): in *Supplement to the Encyclopedia Britannica*, London, 1825: in [17] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年.
- [ 9 ] , “Government,” (Sep. 1820): in *Supplement to the Encyclopedia Britannica*, London, 1825: in [17] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年.
- [ 10 ] , *Elements of Political Economy*, [1821] 3rd. edition., revised and corrected, 1844: in [17] 渡邊輝雄訳『経済学綱要』春秋社, 1948年.
- [ 11 ] , “Periodical Literature – *Edinburgh Review*,” *Westminster Review*, I, 1 (Jan. 1824), pp. 206-49.
- [ 12 ] , “State of the Nation,” *Westminster Review*, VI, 12 (Oct. 1826), pp. 249-78.
- [ 13 ] , *Analysis of The Phenomena of the Human Mind*, 2 vols. 1828; 2 vols. 1869; rept. New York, 1967.
- [ 14 ] , “The Ballot,” *Westminster Review*, XIII, 25 (July, 1830), pp. 1-39.
- [ 15 ] , *A Fragment on Mackintosh*, London, 1835: in [17].
- [ 16 ] , “Aristocracy,” *London Review*, II, 4 (Jan. 1836), pp. 283-306.
- [ 17 ] , *The Collected Works of James Mill*, 7 Vols, London, 1992.
- [ 18 ] Mill, J. S., “Free Discussion, Letter I,” 1823: in [40] vol. XXII. 柏經學訳『モーニング・クロニクル』論文」[47] (1) 所収.
- [ 19 ] , “Question of Population [1],” 1823: in [40] vol. XXII. 杉原四郎・熊谷次郎訳「人口問題論争」[47] (1) 所収.
- [ 20 ] , “Law of Libel and Liberty of the Press,” 1825: in [40] vol. XXI.
- [ 21 ] , “The Corn Law,” 1825: in [40] vol. IV.
- [ 22 ] , “The British Constitution [2],” 1826: in [40] vol. XXVI.
- [ 23 ] , “Perfectibility,” 1828: in [40] vol. XXVI. 泉谷周三郎訳「完成可能



モラリストとしてのミル父子

- 性」[47] (1) 所収 .
- [ 24 ] , “Prospects of France IV,” 1830: in [40] vol. XXII.
- [ 25 ] , “The Sprit of the Age, I-V”, 1831: in [40] vol. XXII. 山下重一訳「時代の精神」[47] (2) 所収 .
- [ 26 ] , “Attack on Literature”, 1831: in [40] vol. XXII.
- [ 27 ] , “Corporation and Church Property”, 1833: in [40] vol. IV. 柏經學・岩岡中正訳「公共財団と教会財産」[47] (2) 所収 .
- [ 28 ] , “Remarks on Bentham’s Philosophy,” 1833: in [40] vol. X. 泉谷周三郎訳「ベンサム哲学」[47] (2).
- [ 29 ] , “De Tocqueville on Democracy in America [I],” 1835: in [40] vol. XVIII. 山下重一訳「トクヴィル氏のアメリカ民主主義論」[47] (3) 所収 .
- [ 30 ] , “State of Society in America,” 1836: in [40] vol. XVIII.
- [ 31 ] , “Civilization”, 1836: in [40] vol. XVIII. 山下重一訳「文明論」[47] (3) 所収 .
- [ 32 ] , “Bentham”, 1838: in [40] vol. X. 泉谷周三郎訳「ベンサム論」[47] (3) 所収 .
- [ 33 ] , “De Tocqueville on Democracy in America [II],” 1840: in [40] vol. XVIII. 山下重一訳「トクヴィル氏のアメリカ民主主義論」[47] (4) 所収 .
- [ 34 ] , *Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848; 7th ed. 1871: in [40] vol. II-III. 末永茂喜訳『経済学原理』(全5冊)岩波文庫, 1959 - 63年 .
- [ 35 ] , *On Liberty*, 1859: in [40] vol. XVIII. 塩尻公明・木村健康訳『自由論』岩波文庫, 1971年 .
- [ 36 ] , *Utilitarianism*, 1861: in [40] vol. X. 水田珠江・永井義雄訳「功利主義」(『世界の大思想 II-6 ミル』河出書房, 1967年所収).
- [ 37 ] , *Auguste Comte and Positivism*, 1st ed. 1865: in [40] vol. X. 村井久二訳『コントと実証主義』木鐸社, 1978年 .
- [ 38 ] , *Autobiography*, 1873: in [40] vol. I. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫, 1960年 .
- [ 39 ] , *The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-48*: in [40] vol. XII-III. 一部が山下重一訳「スターリングとの親交」「サン・シモン派との交流」([47] (1) 所収) に収められているので, 訳文がある部分に関しては邦訳の頁数を表示した .
- [ 40 ] , *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by F. E. L. Priestley, J. M. Robson and others, 33 vols. Toronto, 1963-1991.

- [ 41 ] Plato, *The Republic*: in *The Dialogues of Plato, translated into English with Analyses and Introductions*, Vol. III, by B. Jowett, M. A. in Five Volumes. 3rd edition revised and corrected, Oxford, 1892. 藤沢令夫訳『国家』(上)・(下), 岩波書店, 1979年.
- [ 42 ] Smith A., *The Theory of Moral Sentiments*, originally published in 1759, ed. By D.D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford/ New York, 1976. 水田洋訳『道徳感情論』(上)・(下), 岩波書店, 2003年.
- [ 43 ] Ten, C. L., *Mill on Liberty*, Clarendon Press, 1980.
- [ 44 ] Thomas, W., *The Philosophic Radicals: Nine Studies in Theory and Practice 1817-1841*, Oxford, 1979.
- [ 45 ] Thomas, W., *Mill*, Oxford, 1985. 安川隆司・杉山忠平訳『J. S. ミル』雄松堂出版, 1987年.
- [ 46 ] 小田川大典「J. S. ミルと共和主義」(田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間』名古屋大学出版会, 2006年所収).
- [ 47 ] 杉原一郎・山下重一編『J. S. ミル初期著作集』(1)-(4)お茶の水書房, 1979-97年.
- [ 48 ] 関口正司『自由と陶冶 J. S. ミルとマス・デモクラシー』みすず書房, 1989年.
- [ 49 ] 立川潔「「過渡期」のJ. S. ミル 商業社会における道徳的腐敗と実践的折衷主義」『北海学園大学経済論集』第38巻第3号, 1991年.
- [ 50 ] ,「ジェイムズ・ミルにおける中間階級と議会改革 余暇と陶冶」『成城大学経済研究』第133号, 1996年.
- [ 51 ] ,「J. S. ミルのリベラリズム批判 社会再生における権威の必要性の認識」『成城大学経済研究所研究報告』第16号, 1998年.
- [ 52 ] 深貝保則「J. S. ミルの〈多数の専制〉考(1) トクヴィルとの関係で」『商経論叢』(神奈川大学)第29巻第4号, 1994年.

なお、本文注において、James Mill の文献は Mill, J. で示し、J. S. Mill の文献と区別した。

[ 付記 ]

本稿は平成23年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。